

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



さぬき市
大山 茂樹 市長



【内田】

皆さんこんにちは。

私はファシリテーターを務めます、せとうち観光専門職短期大学、観光振興学科長の内田と申します。よろしくお願ひします。そして、隣が本学の学長で、日本で初めて観光学の博士号を取得した安村克己学長でございます。

今回の対談は、さぬき市の大山市長と対談させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。最初に大山市長、一言お願ひいたします。

【大山】

このような経験が初めてなので、お役に立てるどうか分かりませんが、観光をテーマにしたお話をさせていただけるということで、今、地方公共団体も人口減少ということで、その圏域に住んでいる人だけではいろんなことができない、やはり他の地域の人のお力を借りなければなりません。その一つの手段として、後で安村学長からお話をいただくと思うのですが、観光といえば昔風というと物見遊山ですね。何かを見物して遊ぶという風に思っている方が多いと思いますが、多分今の観光ははるかに深くて広い、そのようになっていると思

うので、行政を預かる身としても、そういったことをもう一度考えるいい機会を与えていただいたのではないかとということで、楽しみにしております。よろしくお願ひします。

【内田】

ありがとうございます。それでは、大山市長からさぬき市の紹介ということで、特に歴史、文化の魅力やお遍路の魅力などをご紹介いただきたいと思います。

【大山】

さぬき市は2002年、平成14年に、当時の大川郡という8町あった群の中の5つの町が合併して誕生しました。それぞれ海側の2町、具体的には志度町と津田町です。それから山



手3町と言っていますが、山側の3つの町、大川町、寒川町、長尾町。いろんな環境も歴史も違うところが合併したということで、それぞれに特徴を持った、いい町だと。市長ですから、当然そのように思っていますが、よくよく考えてみると、当時、海彦、山彦というお話をご存知の方がいると思いますが、海側の2町は、海に非常に関連のあるいろんな産業もしてきました。山側の方は、山彦ということで、その海彦と山彦が海の良さと山の良さをうまく活かしたらどうかということで合併したという風に私は理解をしています。特徴として、特に海があるということで、起源でいうと、4～5世紀の、古い古い昔に、いわゆる畿内、今の近畿地方からいろんな文化が船を使って、こちらに流れてきたということもあり、いろんな古墳が、例えば四国で一番大きい前方後円墳と言われている茶臼山古墳や、もう少し先に津田というところがありますが、津田の古墳群、そういう本当に古い古い歴史、そういったものを、今日まで伝えたことが一つの特徴だと思います。

それからもう一つは、四国遍路が八十八ヶ所あって、一番から八十八番までありますが、これは専門家の方に聞くと「別に一番から順番に参る必要はない」「それぞれに参っていいんだ」と言われていますが、順番としては一番札所から八十八番札所がありまして、さぬき市は「すごろく」でいうと上がり三ヶ寺、こういう言い方は、多分専門的にはしていないと思いますが、最後の三ヶ寺がありまして、八十六番の志度寺、八十七番の長尾寺、八十八番結願の大窪寺というのがありますので、これは1200年以上の歴史があるということで

す。特に今年は八十六番札所の志度寺が創建 1400 年という節目の年ということですので、スピリチュアルというのか、精神的な文化の象徴である四国遍路を使って多くの人に現地に来てもらって、味わっていただきたいと思っています。

今日はちょっと派手な T シャツを着させていただいておりますが、これはさぬき市のオリジナル T シャツということで、この平賀源内が 1728 年に生まれて、色々活躍をしたという土地柄でもあります。幸いなことに、今年 NHK の大河ドラマで「べらぼう」、ご覧になった方もいると思いますが、なんとその「べらぼう」の主人公は蔦屋重三郎、いわゆる蔦重と言われて、江戸中期のメディア王ということで、いろんな本や浮世絵を広めた、その方の物語なんですが、平賀源内と非常に密接な関係があるということで、テレビをご覧になった方はお分かりかもしれませんが、一回目の放送が 1 月 5 日にありましたが、4 月 20 日の放送で、獄死、要は牢屋で死んでしまうという報せが入ります。その間は蔦屋重三郎よりも平賀源内の方が注目をされていて、いろんな話題を呼んだということで、平賀源内という特異な、偉人と言っていいのか、私は奇人の方がいいと思いますが、少し変わっていて 100 年早く生まれすぎたと言われていたぐらい「何でもまずはやってみよう」という源内マインドを、今の世の中でも、現代でも十分活用できるのではないかと。

そういうこともありますので、古くからの歴史、文化を一つの要素として、さぬき市の活性化なり、最初に申し上げましたが、これからはどの市町もそうですが、自分の住んでいる所の人だけでは、いろんなことが完結しない。今まで以上に交流が不可欠になってきていますので、その交流の一つの形態として、観光だけが交流ではないと思いますが、一つの大きい有力な手段としての観光を活かして、さぬき市がこれまで以上に多くの人に知っていただき、しかもそこに住んでいる人はもちろんいい所、他から見ても行ってみるといい所、そういうことをさぬき市としては目指していきたいなと思います。その中の一つの要素として、後でも申し上げる機会はあると思いますが、量から質への転換と言っています。今までは大きさ、数でいろんなことを考えてきたわけですが、例えば都会と人口の数で比べると明らかに少ないじゃないですか。そういう大きさや量で競うのではなく、一つ一つの質の高さ、一つ上の質の良さ、そういったものを一つのテーマとしていますので、今まで住んでいた人も良し、これからここで住む人も良し、それから他から来る人も良し、そういうさぬき市にしたいと思っています。是非とも、さぬき市に現地に来ていただく、これがこれからのキーワードだと思います。

【内田】

ありがとうございます。大山市長から歴史や文化という話もありまして、地域振興、地域創生の話ですが、本学の安村学長もちょうど文化観光が非常に重要だという話をあちこちでお話されていますので、その辺りについて安村学長はどのようにお考えですか？



【安村】

先ほど大山市長にご指摘いただいたように、観光というのが今まで本当に物見遊山や少し浮ついた遊びのように捉えられていまして。ようやく、最近観光という言葉の元々の意味である「光を観

る」「地域の光を見る、見せる」今しがた大山市長からお話いただいた内容はまさに観光というのに結びついてくるのかなと。

もう一つは、お遍路さんがなかなか昔は観光とは結びつかなかったと思うんですね。特にお遍路をされている方は自分が観光客だとは全く思っていないわけで、当然ですが、信仰のためにやっているのですから。まさにその時にお遍路を楽しみながら、時には苦しい想いもして、遍路をされると思いますが、その時に素晴らしい地域の魅力、景色や文化等にふれて、楽しむという気持ちになると思います。大山市長のご指摘の通り、これからもお遍路と観光も結びつけていきたいですし、あるいは今お話になったまさに地域の魅力を、魅力というのは光だと思うのですが見る、見せるということがいわゆるまちづくりと結びついて、実際に1980年くらいから「観光まちづくり」というのがございまして、これは地元の住民たちが主体になって、自分たちの素晴らしい地域の魅力を見せていく、あるいは自分たちでそれに気がつくということで、まさに大山市長がお話になられて、大山市長がさぬき市でやっておられることと結びつくのではないかと思います。

本学のせと短もまさに大山市長におっしゃっていただいたような観光を学生にも教育しますし、世間にも広めて、それを地域づくり、まちづくりと結びつけたいと思っています。そういうところで、さぬき市は今お話を伺っても大変素晴らしい地域の魅力、歴史もありますし、新しいところもありますし、それから素晴らしい風景もある。ストーリーとしては先ほどお話にでていました、お遍路の札所の八十八番、結願の地というのがいいですね。またさらにお話を伺いたいと思いますので、本日はよろしくお願ひします。

【内田】

歴史、文化の話、お遍路の話がでましたが、本日パネルがずらっと並んでおりまして、今年は瀬戸内国際芸術祭の年でございます、さぬき市もいろいろと取り組んでおられるということで、その辺りをご紹介いただけますか。

【大山】

瀬戸内国際芸術祭のお話が出ましたが、3年に1回ずつで今年が6回目の開催になりました、今までは瀬戸内国際芸術祭に参加する要件というのがあって、一つは人が住んでいる島を有している、もしくはそういった島に通う船、港を有しているというしぼりがあったものですから、残念ながらさぬき市は有人の島を持っていないので、今までは要件に欠けるということで参加できなかったということもあるんです。そういう経緯がありましたが、瀬戸内国際芸術祭の方もそれにこだわるのではなくて、海の復権、海をテーマにして海に関係あるところであれば、もう少し幅広に参加をしてくれるところは参加してもらってもいいのではないかなりましたので、私どもさぬき市と隣に東かがわ市という市、それから宇多津町という西の方になりますが、その二市一町が新たに今回参加をして、特にさぬき市はこの暑い時期に来ていただく人には、非常にお気の毒ですけど、夏会期ということで8月1日から8月31日で、さぬき市としては、この旧志度町の志度エリアと旧津田町の津田エリア、津田というのは海水浴場、津田の松原海水浴場というのは、香川県の中でいえば素晴らしい海水浴場の一つで、かつて海水浴が全盛の頃は、高德線という地方の路線があり、海水浴に当時の国鉄、今のJRで海水浴に来てくれていた時代があって、讃岐津田という駅がありますが、おそらく大げさな言い方でしょうが、列車が着いて最初のお客さんが降り、海水浴場までは1km少しあるのですが、最初のお客さんが海辺に着いた時には、列車の中で最後の人が降りようとしていたぐらい、ずっと海水浴の客が津田を訪れていたんです。津田は素晴らしい、私は日本一の松原だと思っていますが、それと共に当時は漁業が非常に盛んで、古い人だとピンとくるのでしょうが、若い人だと分かりにくいと思うんです。サケマス軍団と言いましてサケ・マスを、遠洋漁業で獲りに行った基地があったんです。ですから非常に海とは縁が深いところで、当時は今からサケマス軍団が今年の漁に出ますといえ、私は小学生の時に参加したんですけど、昔で言うと鼓笛隊、マーチングバンドとかですね。あとは船に大漁旗を掲げて大勢の人が、見送りに来て一つのセレモニーという形ですので、瀬戸内国際芸術祭に参加するのが、私のぬかったところもあって、遅くなったなど。津田なんかは瀬戸内国際芸術祭で「そりゃ津田は参加するよね」ということなので。公式ポスターの写真なんですけど3種類あり、津田の海なんです。これはカニの甲羅に似ているということで、別名蟹甲湾と言われて、ここまで皆さんが泳いでいっ

て、そこから飛び込む台があるんですよ。よく見ていただくと三部作になっていまして、皆さんが揃い、飛び込み、一人だけ残っているんです。そういう写真を公式ポスターとして使っていただいて。個人的な話ですが、かつて東京から香川県に出向していた方から年賀状をいただいて、瀬戸内国際芸術祭のポスターを見ているけど、今年のポスターは秀逸だと。これはどこだと見たら、一緒に仕事をした仲ですから、津田湾で撮ったということで、わざわざ年賀状に書いていただいたぐらいですね。まさに海と津田町と志度町、これは切っても切れない関係があるということなので、これに近代アートをうまく結びつけて、今まではなかなか来る機会がなかったインバウンドの方も含めて、本当に広い範囲の人が来てくれて、芸術作品も良かったなど、でもそれ以上に地元の人のお接待、先ほどの八十八ヶ所の遍路文化にも通じるのですが、お接待を受けて何か心が潤ったと、本当に癒しを受けたと。瀬戸内国際芸術祭に初めて参加するので、さぬき市が参加して「あまり良くなかった」と言われたら悔しいので、「さぬき市が参加して前よりもまた一段と良くなったな」と。地元の人に実行委員会に入っていただいて、色々ご協力いただきながら進めておりますので、今年の夏は暑いですが、我がさぬき市にとっては一代チャンスが来たということで、職員にも取り組んでほしいとお願いしているところです。

【内田】

ありがとうございます。瀬戸内国際芸術祭と地域振興、アートイベントと振興について安村学長からコメントをお願いします。

【安村】

今お話を伺っていて、お接待の話ですね。私も思い当たるところがあったのですが、やはり観光をやっていると観光客をもてなすというおもてなしですね。それから最近はカタカナでホスピタリティという言葉がありますが、観光客を呼びたいなら、町の住民からホスピタリティ、おもてなしが大切なんだと言って、「観光まちづくり」をやる時に住民を集めて「おもてなしが大事だから観光客を見たらもてなせ」というようなことを言っていますが、私は必要ないと思ひまして。むしろ住民の人間関係がよければ自然に外から来た人に対して挨拶をしたり、もてなしたりしますよね。それをさぬき市ではお接待という文化がお遍路と結びついていて、その辺りはもう何も言わなくても自然に住民の方が、訪れる人たちにおもてなしをされて、お接待の精神のようなこともお遍路と重なって非常に観光との関わりのおもしろいところかなと思います。今のお話も素晴らしいと思います。それに瀬戸内国際芸術祭のアートがまた関わってくるわけですね。これにつきましてはどうなんですか？アート作品もいくつかありますか？

【大山】

作家の方のお気持ちや、それから全体でどこに何を置くかというのは、香川県全体でバランスを取ってやらないといけないので、なかなか私どもが思った通りにはならないのですが、今のところこの志度エリアでは作品としては4作品。それから津田でも一つの作品と、あとはパフォーマンスですが、台湾のダンス集団の方が、一日ダンスを演じていただけるということで、多くの方にご協力いただいております。アート作品なのでアートの祭り、これが昔のダジャレで言うと後の祭りにならないように、是非この期間は暑いですがいろんな人の協力を得て、会期が終わって「あ、終わった」というだけでなく「次はいつできるのかな」という風に、もしなれば、これはものすごい前進で、基本的には3年後になるのですが、3年後を待たずに「さぬき市には来年も来てみたいな」と思っただけのようないろんなおもてなしができればいいなど。そのおもてなしも、安村学長が言っていたように当たり前で、例えばお遍路さんが暑かったら、少し果物をお接待ということでお出ししたり、飲み物を出すというのは、ずっと続けてきている話なので今更「ああしなさい」「こうしなさい」と言わなくても自然にできて、その自然にできたことが多分来た人にとっては心地良いのではないかなと。人に言われて「あそこに持っていきなさい」というのではなくて、誰に言われることなく自然に自分が飲んでいたらもう一本、例えば飲み物を買ってどうですかと、そういうことは形には現れにくいのですが、すごく心に印象に残るのではないかと思っていますので、芸術祭が終わった時に「市長、次いつできるかな」と地元の人が言ってくれるのを楽しみにしながら、やっているところです。

【内田】

ありがとうございます。観光というのは、定住人口だけでなく交流人口や関係人口を増やすという非常にいいツールだと言われていますが、その辺りは安村学長いかがでしょうか？

【安村】

今のお話もまさにその通りで、瀬戸内国際芸術祭に訪れる人が集まるので、よく他の地域で言われますが、瀬戸内国際芸術祭をどこかの観光スポットに回せないかや、あるいは瀬戸内国際芸術祭が終わった後に、どのように瀬戸内国際芸術祭から地域の観光を展開するんでしょうと言われてますが、まず瀬戸内国際芸術祭に来る訪問客は瀬戸内国際芸術祭に来ますので、それ以外のことはあまり見ないですね。ただ先ほど大山市長が説明されていた通り、そういうおもてなしですとか、あるいは素晴らしいさぬき市の風景を見れば、瀬戸内国際芸術祭どころではないと言いますか、それを超えたところでさぬき市の魅力が訪問客に伝われば、それが口コミも含めて日本中、ひいては世界に繋がること

あるのではないかと思います。そういう魅力の溢れるところなんだと、私もまだまだ勉強不足ですが、これから見せていただいて、本学もいろいろと地域連携で、地域それぞれの魅力を探しながら地域づくりの観光振興をやっていますが、さぬき市でも是非お世話になりたいと、あらためて大山市長のお話を伺って思いました。

【大山】

もちろん、さぬき市がやっていることが全国レベルで注目されるような素晴らしいことをやっているとは思っていません。

ただこういう地元の市長に就いていて感じる



のは、観光は先ほど物見遊山の話を見せてもらいましたが、見たことないものを見て、ある程度満足をしていたということがあるのではないかなど。例えば大串半島という素晴らしい半島がありますが、そういったところの景色、瀬戸内海では勝手に一番と言っていますが、それを見たら感動しますが、私はそれだけでは不十分だと思うんですよ。感動したことが見た人の人生の中でインパクトを与える、その比重が高まってきていると。少し言葉を変えると体験型の観光とよく言われるんですが、単に見るだけでなく、自分が作る、自分が参加する、その場に行く、そういうことで、その人の過去があり、その人の今があり、その人の未来がある。そういったことをもう一度、じっくりと考える機会を観光の中に入れると、いろんな人が来てくれるのではないかなと思っていて、特に一人一人違うように感じていただく、そういうものを我々も提供していく。そのためには、一度で終わりというのではなく「もっと良くなるか」「もっとその人の人生にインパクトを与えるものがないか」ということを考えることによって、観光も出来上がるのではなく、現在進行形で新しいものを作っているという大きいムーブメントができれば、これは地域の人にとっても誇りにもなるし、やはり地域で頑張ってみようとなるのではないかと。

もう一つだけ申し上げたいのは、今までは例えば活性化といえど、地域でいい物を作って、都会に持って行って、都会の人に消費してもらうというのは一つの大きい要素でありました。さぬき市のように小さいところは、それももちろんやりますがそれだけでは不十分なので、物ではなくて人間に来てもらう。人間にその地に来てもらう。こういうことがもしできれば、今までとは一味も二味も違ったような観光になるのではないかと。例えば、うどんも東京でも今は

本当に美味しいうどんが食べれます。でも私どもは同じ美味しさでも、さぬき市に来て大串半島を見ながら食べるうどんと、銀座のど真ん中で食べるうどんは指数で表すことはできないですが、その人にとってみれば明らかに違うのではないかと、違って欲しいなと思うんです。ですから、これからは物の物流を発達させることも大事ですが人の移動、人流をうまくできたところは地方として、すごく可能性があるのではないかと。その一番の可能性は人が来てくれるのなら地域の人わざわざ東京に行かなくてもいいんですよ。大阪に行かなくてもいい。一極集中で住みにくいと言われていたところに行かずに、地元において地元のいいところを向こうからわざわざ来てくれる人に提供する。そういうことになれば、逆に地方の活性化に繋がるのではないかと勝手に思いながら今やっていますので、是非こちらこそ観光の考え方を教えていただければありがたいなと思います。

【安村】

すでに今、大山市長に全て語っていただいたような感じでして、まさに大山市長の言われた観光が我々せと短も目指しているところでして。

元々地域の光を見るというのは、その場に訪問者が自分の体をそこに置いて全体を素晴らしいと、文化や歴史を体感して本当に来てよかったと思うことが観光だと思うんです。

食に関しても、特産品として都会へ流通するよりも、さぬき市に来ていただいて消費してもらおう。そして地域の人と交流することで地域の魅力を知っていただければ、移住にもつながりますよね。観光で先ほど話に出た交流人口や関係人口、場合によっては移住してきて住みたくくなりますよね。そういう観光と地域の関係というのは我々も目指しているところでして、もうまさに素晴らしいお話を大山市長から頂いて「これだ」と思っています。

【内田】

ありがとうございます。話題を変えまして、この動画を見ている人は、高校生が見ているかと思しますので、大山市長のキャリアやお仕事に対する想いをお伺いしたいと思います。

大山市長は先ほども話題に出ましたように、津田町のご出身ということで、大学は京都に行かれて、香川県に戻って来られて今は地域のまとめ役をされているという、その辺りのプロフィール、キャリアを高校生に語る感じでもよろしくお願いします。

【大山】

人の見本になる、人の参考になるような人間ではないんです。本当に普通の人間なんですけど、逆に言うと普通の人間が政治もやるべきだと私は思っています。特に選ばれた人だけがやるんじゃなくて、普通の人でも、自分が色々勉強

したり、やる気を出せばできるというように、もし私のことを見てくれる人がいれば本当にありがたいなと思います。

それこそ小さい時から順風満帆ではなくて、私は津田の海水浴場に水着に着替えたなら1分ぐらいで行けるような場所が実家なんです。今は母親が住んでいます。例えば、遊びというのは津田の松原は砂地で、先日長嶋茂雄さんがお亡くなりになりましたけど、野球が特に男の子にとっては、もう一番の娯楽だったんです。ところが貧しい農家ですので、基本的にグローブやボール、バットというのはまともなものがない。ベースもないので、砂地に三角の線を引いて、それで竹のようなものとゴムまりを使って野球をして育ちました。夏は少し酸っぱい青りんごが比較的安かったので、それを買って友達と一緒に泳ぎに行くと、青りんごを海へ投げ、あそこまで泳いでいこうということで泳いでいくと、青りんごに塩味が付いてそれを食べたりするんですよ。そんな環境で育ったものですから、中学校から高校へ進む時に、先ほどのサケマス軍団の漁師の子どもがたくさんいて、当時は高校へ進む子というのは、あまり出来が良くないから高校へ進むと。私は高校へ進む側ですけど。出来が良くないというのではなくて、漁師になったらすぐ稼げるんですよ。中学校から漁師になって、サケマス軍団で一航海したら、これも誇張した話なんですけど、家が一軒立つと。ところが大山みたいにこれといった能力がない奴は、高校へ行って、本当にお金を使うだけしかないような雰囲気があったので、逆に中学校から就職する、例えば漁師になる、大工になるというのは仲間内では羨望の的です。尊敬されてたんですよ。それが良いか悪いかは別にして、多様な中で大きくなった年代、1950年生まれですが、昭和25年で団塊の世代より一つ後で生まれているので、たくさんの中で育ったのは私にとっては今思えば非常にラッキーだったなと感じています。

それでは大学に進むとはどうだったんだという話は、青年にありがちな夢みたいなものがあって、これをご覧になっている人はそうではないと思いますが、人間の夢の大抵は叶いません。夢が叶っているのは大谷翔平ぐらいですから。でもなんか夢を見ることができた。それが大事だと思います。アメリカのロケット学者が、上手いことを言っているんです。

「昨日の夢が、今日の希望になり、今日の希望が明日の現実になる」と。

今、夢というのは大抵叶わない場合が多いですが「夢を見て叶わない」と「夢さえも見ない」その人の人生の差は大きいと思うので、子供たちにも夢を是非見てもらいたい。ただ、叶わない時に悲観するのではなくて、何か自分ができるところを探してやったらどうですかと。私の場合はそれが市長という職業を選ぶことが、自分にとってできることだということで市長をしているという話をしています。ですので、将来設計図通りになったわけではないので、人様にお

話しすることではないですが、やはり夢を持って、希望を持って、それを一つでも二つでも実現する、そういうプロセスが人間としては、多くの方が体験できることだと思っています。夢を見ることは多分みんなできる。ただ夢を叶えることができるのは珍しい。でも叶わなくても自分ができることに行き当たる。そういうのは生きがいにつながるし、自分が生きがいを持って暮らすと、生きがいがあって暮らす人の周りは明るいですよ。ですから全体的に、良くなると信じて今、市長をやらせていただいております。

【内田】

市長が大学を卒業されて、今のお話でサケマス軍団やお金を稼ぐということ、その当時のお金を稼げる企業に行くという手もあったと思いますが、公務員、役人の道を考えられた何かきっかけがございますか？

【大山】

人間が少し変わっていたというのがあって、当時から中央思考というのはあったんですよね。ですから大学も、東京の大学の人には失礼になるかもしれませんが、東京の大学にだけは進みたくないと。意地を張っている大学がないかなと思って、京都大学へ進みました。就職する時も、色々な有名企業もありましたが、先ほどの話ではないですが、自分ができることは何かと考えたときに、いろんな経験をしたことを地元で活かすということで、市長になる前は香川県職員だったんですよ。香川県職員として何かできることがないかなと思っていましたけど、市長になったのは本当に偶然で、当時の市長が体調を崩されたので市長になりましたが、その時にとってもショックなことが一つあったんです。香川県職員のときは、香川県民はこんなことをしてもらいたいと思っていますと、自分なりに一生懸命働きました。ところがさぬき市長になって、さぬき市民と話したときに、さぬき市民は別にさぬき市には期待していないんです。香川県にも期待していない。国にも期待していないんです。期待していないというのは正しい言い方ではなく、市、県、国、誰でもいいので、さぬき市民にとって良いことをしてくれればいい。それをいや国が、県が、市長がするというのは我々のおごりかなと、少し勘違いかなと思います。今も国がすることが一番早い、国がする方がいいと思うことは国へいきますが、やはり市ができることは一番早くできるので、そういう意味では市ができることを探して、できないことをするという、そのことが良いか悪いか分かりませんが、ずっと残っている一つの自分のポリシーです。

【内田】

香川県職員時代に、いろいろとこういうことやってみようと思ったことがあったけど、今、市長になられて自分のもっと手近なところでいろいろとできるということですね。

【大山】

そうですね。だからあまり「これは国、これは県」もっと極端なことを言うと「これは自分の部署ではない」と俗に言う、たらい回しみたいなことが、もしあるとすれば、それはやはり公務員として一番恥ずべきことであって、もう一度自分のところでできることを考えて、できなければ他部署に回しますが、できる、できないを検討する前に「前はこうだった」というだけで、他の部署へ回すと、お互いの信用、信頼関係がなくなるというのが、今も職員の方には、非常に厳しいことなんです。お願いをしているというのが長年やってきた今の反省点であります。



【安村】

話が相応しいかどうかわからないんですが、どちらかというと地域の行政に割と中央政府が口を出してくることはないですか？

補完性原理というんですかね。地域のことはやはり

地域でやった方がいいですよ。一番重要なことを一番分かっているわけですので。私思うんですけど、やっぱ観光関連だと道路を作るのにも、中央政府にお伺いを立てないといけないということが出てくると、どうしても地域の本位で作りたいたことができないことが日本の政治体制であるのではないかと思います。

【大山】

多分今も、おっしゃっていたことがあるので、我々も反省しなければならないのは「権限と財源がないから地方でできない」という人がいますが、これももう少し検証すべきだと思います。権限がない方が楽ということがあるんですよ。それは国しかできませんと言えば、国へ全部預けるでしょ。そういう制度もあります。本当にそうなのかと。それであつたら本気を出すのであれば権限と財源を地方に持ってくるような働きかけは、皆さんしたのですかと言われたらなかなか「はい」と答える市長さんは残念ながら少ないんですよ。

だから、その辺りはすぐに人のせいにした方が人間楽じゃないですか。そっち行きなさいとか、それにならないようにするためには日頃から住民の人が何を考え、何に困っているかを考えておかないと。今は選挙の話もありますけど、選挙の時だけ考えるのでは、本当のことは分からないと思います。道路は国土

交通省や県道というのではなく、トータルで地域を活性化するために、役所の縦割りを自分で取り外すぐらいの心意気がないといけないと思っています。

【安村】

まずそれは大山市長が地域のことを「これをしなければならぬ」と考えながら、住民の意向を汲んでいらっしゃるんですよね。

それと話は変わりますが、コロナ禍があり、あの当時はさぬき市も大変だったと思いますが、実は2021年にせと短は開学しまして、観光の専門職短期大学と謳っていますので、観光が壊滅状態のときの開学でした。それ以来、学生募集には苦勞しているところですが、その時にさぬき市は、大山市長はどのような施策をとったのでしょうか？

【大山】

新型コロナウイルスの正体が今でも十分わかってないところあるんですよ。だから正体が分からないものの対応が非常に難しいので、こうだと決めつけてやって、それが原因でその方がお亡くなりになったり、不幸なことが起こった時に「お前どうするんや」と言われれば、つつい医者や専門的な者に従わざるをえないので、例えば「マスクをきなさい」「手洗いをきなさい」それでも沈滞しましたよね。要は人が集まってはいけない。「三密がだめだ」「密集してはだめだ」ということで。当時、高校野球も全国大会が中止になったと思うんです。その長い歴史の中で、例えば高校3年生、2年生は「なんで自分の時に」と思ったのでしょうか、元気な子どもたちなのでコロナと言いながら大会ができるんじゃないかなと思って今でも悔しい想いをしている人がいるので、それに対して私たちはきちんと答えていないと思うんです。本当に苦い経験なので、今度同じことが起こった時にどうすればいいのかということ、今のように少し収まってきた時に十分議論を、と思っています。

【安村】

先ほどのお話と関係しますが、コロナ禍の時もやはり国の対応、県の対応として、大山市長がどのようにコロナ禍の対策をされていて、いろいろな観点が錯綜したのだと思いますが、ご苦勞があつたんじゃないですか？

【大山】

当時は、国もわからなかった、県もわからなかった。もちろん市もわからない。そんな状況の中、日本の国はそれが一番良いところだと思いますが、基本的な人権を尊重するじゃないですか。中にはそうでない国もあって、あのような状況になれば全部統制して、右から左まで言う通りにしない奴は処罰する、みたいことがあるじゃないですか。日本は本当に丁寧に丁寧に、最後まで人権を守ろうとしていたでしょ。そのことがなかなかうまくいかなかった部分はあると思うんですよ。今後も同じことが起こると思うので、主としての役割があ

って、国の役割、県の役割、市の役割、そして住民一人一人の皆さんの役割、そういうことをいつも議論しながら、例えば瀬戸内国際芸術祭でも同じことが言えます。「住民としてどのように協力したらいいのか」ということを私のところにいつも言ってくれる人がいるので

「こういう方法がありますよ」

「ボランティアでもどうしたらいいんですか」

「こんな方法がありますよ」

しかし、最後はご自分の判断で、ボランティアに行くことをお決めになっていないと市から、県から指示されて行って、必ずしも良くないこともあるんです。そこで熱中症になった時に「あれは自分で選択したんだ」と思えるように、一人一人が成長していく。コロナは高い授業料は払ったのかもしれませんが、そういう経験になったのではないですかね。

【安村】

お話を伺っていると大山市長の中では、国も県もそれから市も住民のレベルでも、うまく柔軟に課題を見つけて発想されてますね。

【大山】

発想はしてるんですけどね。現実はどううまくいってないので。

例えば道路はあった方がいいでしょ。ないよりはあった方がいいですよ。でも今は議会でもそういう言い方をしていますが、あった方がいいものを作れる状態ではないんです。なくてはならないものを作らないといけないのに、あった方がいいということに引きずられて、作らなければいけない、やらなければいけないことが後回しになっていることがいろんなところにあるんです。もちろん道路を作ることを後回しにすることではないです。そういう観点で考えていかない。

観光の話に少し戻らせていただくと、観光という狭い範囲ではなく、人間そのもののあり方とすごく関係があるのだと思います。みんなが一つの目標に知恵を出し合って、本当の意味で多くの人に良かったと思えるような観光が広がっていく。そのためにはリーダーというか、いろんな知見を持った人、それから意欲を持った人、そういう人材がいると思うので、ぜひ大学では頑張っていたいて人材を送り出していただきたいと思います。

【安村】

今日は大変素晴らしいお話をいただいたので、大山市長にご指摘いただいた、その通りのそれに見合うような人材を私どももつくっていきたくて思っております。

まず、観光の専門職を育てるということが、本学の教育の一番の目標になっていますが、それ以前に先ほどの大山市長のお話にもありました通り、夢を描き

にくい時代になっていますよね。大谷翔平のように世界に打って出るような、そういう夢はなかなか描けないと思いますが、大変な時代になってその中で自分の将来をどんどん切り拓いていくような力を、まずは身につけさせなければいけないと思います。その時に観光というのは、大山市長もお話しされていた地域と観光を合わせて創造していくような、そういう教材になりうると思うんですね。それを本学ではこれからどんどん取り入れて、さぬき市は大変素晴らしい魅力がいっぱいありますので、そういうところを学びの場にさせていただきたいと思います。

本学は「キャンパスは瀬戸内海」をキャッチフレーズにしていますが、もちろんさぬき市も学びの場にさせていただいて、観光を教材にして創造的、まずは自分で考える力を育てて、共創力を身につけていくようになればと思っています。

【大山】

ただ単に学問の1セッションというのではなく、哲学的なものも含めて大きな範囲で観光の人材を育てていただきたいし、共に創るといふ共創の話もされて



いましたが、私どもは共に生きる共生を、職員にもいつも話をしているので、共生とはいろいろな言い方がありますが、これは四国学院大学の名誉教授の方が言われたことで「良いことを言うな」と思ったんですよ。共に生きるということの一つは、お互いが認め合わないといけない、お互いがその支え合わないといけない、お互いが必要とし合わないといけない。私が感動したのは4番目の言葉で「お互いが許し合わないといけない」と言われたんですよ。

今、ロシアとウクライナの問題、イランとパレスチナの問題ですが、やはり人間は許し合う、仏教のことはよく分かりませんが「慈悲」と言うのでしょうか。相手のことを許す、そのことが今の世の中に欠けているのではないかと。

「そういうあなたでも社会の一員であることを私たちは受け入れますよ」という、許し合いが共に生きる大事なことだという話を聞いて、すごいなと思いました。

これからの地域の活性化で一番大きいのは、地域に住んでいる人、一人一人が例えば瀬戸内国際芸術祭でいいますと、瀬戸内国際芸術祭をして良かったなと思う人をもっと増やすことだと思います。立場によっては「お客さんは来てく

れたが自分にとってはあまりプラスではない」「むしろゴミを散乱されたり、車が渋滞して困ったことが多かった」という人もいます。そういう人には本当の意義を部分的な意味ではなく、将来、今に関わり過ぎていると人間、視野が狭くなるので10年先のさぬき市を見た時に「あなたには迷惑かけたかもしれないが、それにより10年後はこうなる」ということを、総括の中でお願いしたいと思います。統計を取ったら100%が瀬戸内国際芸術祭が良かったと、地元の方は思っていないというアンケート調査を聞いて、なるほど。それが現実なのでやめるということではなく、その人も一緒になってできる仕組みを考えたら、7回、8回続いていく。それにはやはり地元の人にかに値打ちを分かってもらえるのかを、夏会期に向けて一生懸命頑張っています。

【安村】

それはもうまさにお遍路、お接待の精神に結びついてくるということですね。

【大山】

そういう文化は一朝一夕にはできませんので、長い時間をかけて試行錯誤があったのだと思います。

例えば暑い時にみかんがあります。それで自分も食べたいなと思う。ところが同行二人という風な笠をかぶったお遍路さんがいます。損得関係なく「あ、これはあの人に食べてもらった方が自分にとってもいいのではないか」という、これは世界に誇れるべき文化だと思うんですよね。



【安村】

まさに瀬戸内国際芸術祭で外国の訪問客が来て、その時にお接待の精神が伝われば、もうそれは世界に誇れることですよ。

本学はもう一つの表題で「世界を見渡して地に足

をつけて行動しよう」ということを学生に訴えかけていますが、まさに

「Think Globally, Act Locally」ということ打ち出していきたいと思うんですけど。

瀬戸内国際芸術祭を通じて、さぬき市からお接待の精神が世界広がると素晴らしいですよね。

【大山】

素晴らしいと思います。今、世界遺産登録を四国四県で一生懸命目指していますが、その会で少し生意気なことを言ったんですよ。

今はユネスコの基準に合わそうといろいろと努力をしている。その努力は必要だし必ず生きていくと思います。それで分かっていただきたいことは、四国遍路の基準がユネスコの基準を上回り、ユネスコ側から「登録していただけませんか」というぐらいの誇りを持ちながら謙虚になってやりましょう、と言ったんですよ。そうすると、ある八十八ヶ所の住職が「あんた、ええこと言うてくれた」「今まで言いたかったけど言えなかった」と言ってきた住職がいました。

同じ人間としてやはり守るべきところは守る、けれども聞いてもらいたことは聞いてもらう、そういう誇りがあると思いますし、今グローバルと言うじゃないですか。私はグローバルの本質はローカリティだと思うんですよ。

そこにしかないものを世界の人が認めるので日本が素晴らしいと、日本のローカルをものすごく価値を認めてくれるんです。「どうして日本人はそんなに素晴らしいものがあるのに外国のものばかり褒めるのですか？」と言われて、少し卑屈になっていたのかもしれないなと感じました。

【内田】

ありがとうございます。最後の方で大山市長からどういう人材が、これからの世の中に必要かという話をさせていただきましたし、世界を見ながらも地元に着した行動ができるというお話もさせていただきました。

本日はさぬき市の大山市長との対談でした。どうもありがとうございました。

【大山・安村】

ありがとうございました。

★★★アフタートーク★★★

———今のお考えになられたきっかけは———

【大山】

良い意味でも悪い意味でも我々団塊の世代というのは、私は良い意味だと思いますが、色んなことを勉強しましたが大切なのは友達なんですよ。先生が役に立てないというわけではないんですよ。小中学校は子供の数が減少したら統合するじゃないですか。その時に卒業生が反対に来たんですよ。

「自分たちが卒業した小学校を廃止するとは何を考えているんだ」

「気持ちはよくわかる」

「自分が卒業した小中学校はあった方がいい」

「ですが、小中学校で一番良かったことはなんですか？」

「私は少なくとも先生よりも友達をたくさん持てたことですよ」

今の少子化の中で統合しなければ友達の数を確認できない。学校は卒業生のためにあるのではないですよ。 「今の子どもたちが友達と触れ合う機会を作るために、大人の責任として賛成してくれとは言わないが反対はしないでください」と言うとその人は帰って行きました。

色んな経験の中で、象徴的な言葉だけを見れば大したことはないのですが、その裏側にはたくさんの人生経験みたいなことがあるので、すぐに答えをスマホで、音声で答えることはすごいことだとは思いますが、やはり広辞苑であかさたな・・・で、言葉を探することで人間は成長すると思います。もうそれは古い人間かもしれませんけどね。新聞も紙ベースでは読まない人がたくさんいます。「見たいものだけ見た方が無駄なことに時間を使わなくて済むじゃないですか」「無駄ではないんだけどなあ」そこへ行き当たるまでに他の言葉が目に入って「あれ、これってこんな意味か」それは時間がかかるだけですけど、一つの言葉を辞書で引く時には十ぐらいの言葉が頭の中に入ってくるんですよ。中学3年生がインターンシップに来るんですよ。

最後の1時間ぐらい、少し話をしていて「中学校で何かスポーツをやっている？」と聞いたら「テニスをしている」と。

「私も今はこんな体だけど中学校の時はソフトテニスをしていたんだ」

当時、テニスのことはよくわからないので「いつの日かウィンブルドンのセンターコートに立つことを目標に練習していた」と言ったんですよ。

その生徒は何て言ったと思いますか？

「市長さん、できないことを考えるのは無駄じゃないですか」

「時間を無駄にしましたね」と言われて

「その時に君ぐらいだったら、もっと他のことを勉強できていた」と冗談で返したんですけどね。当時は硬式テニスも軟式テニスも、テニスというだけで年に1度のウィンブルドンの大会に出場することを目指して、夢です。

それで「君は高校に行ったらテニスをするのか」と聞くと

「サッカーをします」

「どうしてサッカーをするの？」

「僕はテニスの才能がないんです」と言うんです。

「それは誰かに言われたのか？」

「誰にも言われていない」

「自分はテニスしても大したことがないなって分かったんです」

「そうか、君は賢いな」

現実的というのか何か寂しい気持ちになりました。出来ないことを出来るというのは困りますが、最初から自分の可能性を狭めているんですよ。

